

令和5年度 (インクルーシブ教育実践研究校B) 報告書 温品中学校

1 学校の課題

令和5年度における本校の特別な教育的支援を必要とする生徒の割合は、15.7%である。日々の授業等に困難を抱えている生徒は、この割合以上に存在していると考え。そのような生徒たちを支援するために、今まで教師によってまちまちに行っていた実態把握の方法を、共通したものにし、その実態把握を基に具体的支援策を考えて行く必要があると考える。

このような課題を解決するため、本校では日々の授業等に困難を抱えている生徒の実態把握を行い、ケース会議等を通して合理的配慮について考え取り組むことが、他の生徒の教育的配慮や支援につながり、「やればできる」を実感し、自己効力感を高め、学力向上へとつながるのではないかと仮定し研究を進めた。

2 研究主題

「やればできる」を実感し、自己効力感を高め、学力向上へとつなげる。
～合理的配慮から教育的配慮へ～

3 取組内容

(1) 支援を必要とする対象生徒の実態把握

- 学校として、実態把握するための視点を合わせるために、『『小・中学校、高等学校におけるインクルーシブ教育システム推進のためのコーディネートハンドブック [2020年版]』福島県特別支援教育センター』を参考に、「生徒把握シート (別添資料1)」を作成した。
- 管理職・特別支援コーディネーター・教科担任・学習サポーターが、「生徒把握シート」を活用し対象生徒の授業観察をした。

(2) 「生徒把握シート」での実態把握を基にした具体的支援策の検討

- 管理職・特別支援コーディネーター・担任・スクールカウンセラーで行うケース会議で、「生徒把握シート」での実態把握を基に、生徒の「学びのタイプ」や「困難さ」に応じた具体的な支援策を検討した。
- 学校として、ケース会議を開催するための視点を合わせるために、「チーム支援シート (別添資料2)」を作成した。(参考:『『小・中学校、高等学校におけるインクルーシブ教育システム推進のためのコーディネートハンドブック [2020年版]』福島県特別支援教育センター』)
- ケース会議で決定した具体的な支援策を、特別支援推進委員会や職員会議等で教職員に情報共有をした。

(3) 対象生徒への取り組み

【2年生 生徒A】

- 「生徒把握シート」を活用して学年による実態把握

気になることがあるとそちらに意識が行き授業に集中できず、自分のやりたいことをやることが多い。例えば、提出期限が迫っている課題を授業中に取り組み、教師に注意をされたのにも関わらず取り組み続けたり、他の生徒がスピーチをしていても聞かず自分のスピーチの準備をしていたりする。授業道具の忘れ物も多く、授業と関係ないことをやることが多いなどの様子から、次の項目に困難さがあると把握した。

行動面 : ①忘れ物が多い、物をなくす ②集中力が続かない、気が散りやすい。
⑦ささいなことですぐ怒る、泣く。⑧他人を妨害したり、邪魔したりする。
対人関係 : ③人の気持ちを共感できない ⑤配慮のない発言が多い
こだわり等 : ①強いこだわりがある・興味に偏りがある。

体育や音楽、英語のインタビュー活動など、体を動かすことを伴う活動は参加することができ、理解が良いことが分かった。帯時間で行うゲーム要素のある活動に積極的に参加できることができた。また、学級活動で「体育祭に関する1分間スピーチ」をした時は、「学級で団結する大切さ」を学級に伝えた。このような様子から、次の項目に学びのタイプや良さがあると把握した。

行動面 : ②体育の教科系の仕事は集中が続く。
⑧授業中、教師が個別支援をした時は、他人を妨害したり、邪魔したりしない。
対人関係 : ③人の気持ちに共感できる。
こだわり等 : ④特定の習慣や順序にこだわる。(勝ち負け、一番)

上記のような実態把握より、ケース会議で【学びのタイプや良さ】体得型（実際に体を動かして理解したり覚えたりするのが得意）であると予想した。そして、【特に考えられる学習上または生活上の困難さ】を、「心理的な不安定」と「注意の集中を持続することが苦手」と予想した。

『小・中学校、高等学校におけるインクルーシブ教育システム推進のためのコーディネートハンドブック〔2020年版〕』福島県特別支援教育センターより

困難さ【10の視点】

- ①見えにくさ ②聞こえにくさ ③道具の操作の困難さ ④移動上の制約
⑤健康面や安全面での制約 ⑥発音のしにくさ ⑦心理的な不安定
⑧人間関係形成の困難さ ⑨読み書きや計算等の困難さ
⑩注意の集中を持続することが苦手

○「チーム支援シート」を活用した具体的支援策

支援策・・・「授業の始めに帯活動を入れる」

ケース会議では、「心理的な不安定」と「注意の集中を持続することが苦手」という困難さを支援するため、毎時間同じ活動を設け、短時間でも集中し授業にスムーズに参加できるよう授業の始めに帯活動を取り入れることに取り組んだ。

数学・・・授業のはじめに取り扱う例題が宿題になっているおり、次の授業のはじめに宿題の答え合わせをし、ペア学習で教え合いをする。

音楽・・・楽譜が読めるようにするために、授業のはじめに音符や音楽用語でのビンゴをする。ビンゴを5回実施した後に、小テストをする。

英語・・・テレビに映し出した絵を見て、グループで英文にする。

4 検証結果

【2年生生徒Aの変容】

(1) 「チーム支援シート」を活用した具体的支援策についての検証

以下の表1は、2年生生徒Aの実態把握から「推察される困難さ」の改善に関わるアンケート結果である。アンケートは、管理職・特別支援コーディネーター・教科担任・学習サポーターが回答した。

表1から、2年生生徒Aの実態把握から「推察される困難さ」は、「対人関係」や「こだわり等」に比べて、「行動面」は改善したと言える。

表1 実態把握から「推察される困難さ」の改善に関わるアンケート結果

行動面① 忘れ物が多い。物をなくす。				
改善した	やや改善した	どちらともいえない	あまり改善していない	改善していない
30%	20%	50%	0%	0%
行動面② 集中力が続かない。気が散りやすい。				
改善した	やや改善した	どちらともいえない	あまり改善していない	改善していない
10%	40%	0%	40%	10%
行動面⑦ ささいなことですぐ怒る。泣く。				
改善した	やや改善した	どちらともいえない	あまり改善していない	改善していない
40%	10%	50%	0%	0%
行動面⑧ 他人を妨害したり、邪魔したりする。				
改善した	やや改善した	どちらともいえない	あまり改善していない	改善していない
30%	30%	30%	10%	0%
対人関係③ 人の気持ちを共感できない。				
改善した	やや改善した	どちらともいえない	あまり改善していない	改善していない
20%	20%	60%	0%	0%
対人関係⑤ 配慮のない発言が多い。				
改善した	やや改善した	どちらともいえない	あまり改善していない	改善していない
10%	40%	40%	0%	10%
こだわり等① 強いこだわりがある。興味に偏りがある。				
改善した	やや改善した	どちらともいえない	あまり改善していない	改善していない
20%	0%	40%	20%	20%

(2) 授業に関するアンケート結果についての検証

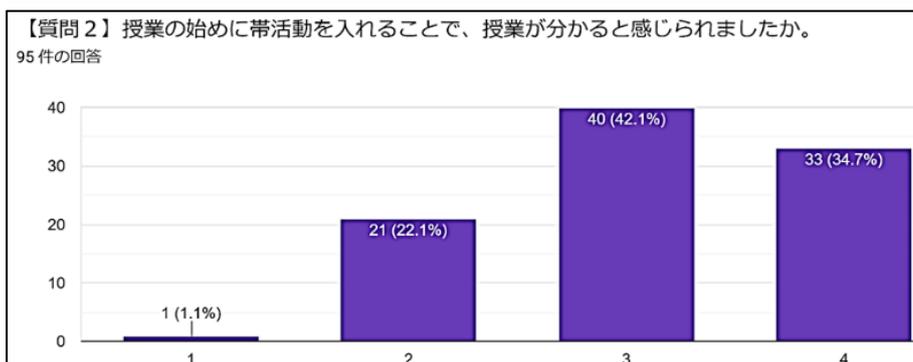
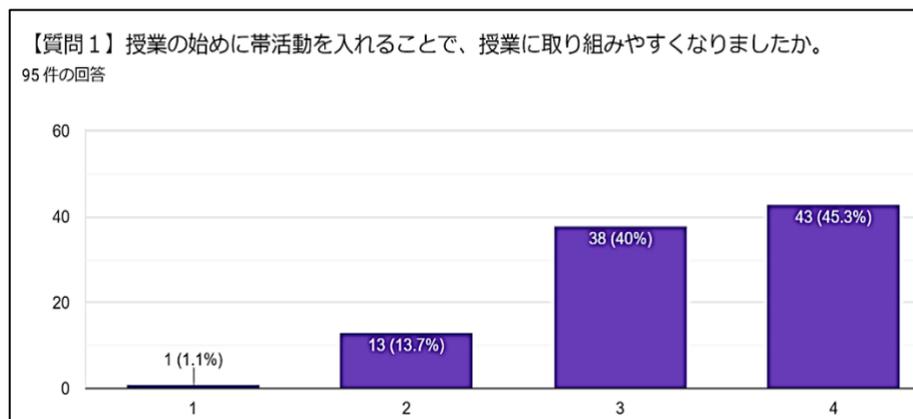
次頁の表2は、授業に関するアンケート結果である。アンケートは、2年生の生徒全体が回答した。

2年生生徒Aは、【質問1】「授業の始めに帯活動をいれることで、授業に取り組みやすくなりましたか。」と【質問2】授業の始めに帯活動をいれることで、授業が分かると感じられましたか。」において、「とてもあてはまる」を選択している。

表2 授業に関するアンケート結果

(3) 考察

以上の結果から、「チーム支援シート」を活用した支援策「授業の始めに帯活動を入れる」は、2年生生徒Aにとって困難さを支援するための効果的な支援策になったと考えられる。そして、表2からこの支援に取り組むことが、2年生の他の生徒への教育的配慮につながったと考えられる。



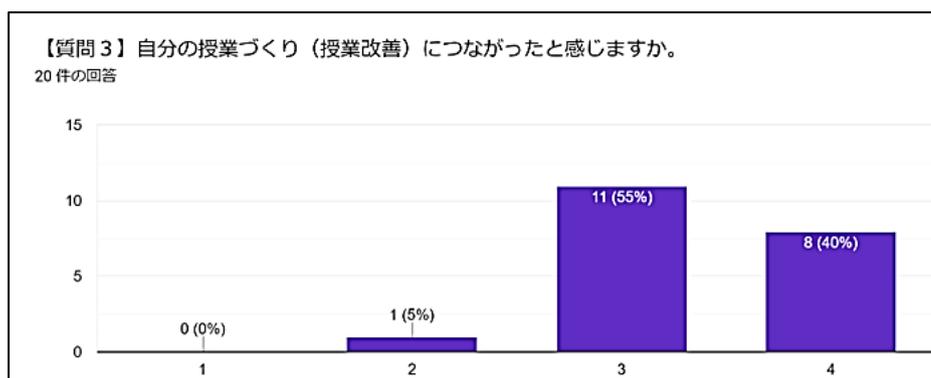
【教職員の意識】

(4) 年度の取組に関するアンケート結果について

次頁の表3は、年度の取組に関するアンケート結果である。アンケートは管理職・特別支援コーディネーター・教科担任が回答した。

表3から、教師から今年度の取組が「自分の授業づくり（授業改善）」につながったということが分かる。具体的には、「授業での活動を短く区切ると、生徒が以前よりも集中することに気がついた」、「ワークシートの設問対しナンバリングをすることで、生徒のやるべきことが明確化されることに気がついた」等の感想があった。

表3 今年度の取組に関するアンケート結果



5 研究成果

1 生徒の実態把握とケース会議の視点が統一され、教員間の意識統一ができた。

今まで、教師によってまちまちに行っていた実態把握の方法を、「生徒把握シート」を作成したことで、実態把握の視点を統一することができた。また、「チーム支援シート」を作成したことで、ケース会議で生徒の困難さに対する支援策を検討する視点が統一され、支援策を検討しやすくなった。来年度は、継続して「生徒把握シート」で他の生徒の実態把握に行い、「チーム支援シート」もケース会議で使って行く。

2 対象生徒の支援が全体の支援につながった。

<表2>から分かるように、2年生生徒Aの支援策が、2年生の他の生徒への教育的配慮につながったと考えられる。課題としては、本校では日々の授業等に困難さを抱えている生徒は他にも多く存在しており、困難さを抱えている生徒全員を実態把握ができれば理想的だが、それは困難である。優先順位をどのようにつけて、どの生徒の実態把握をするのか、その基準は明確にできなかった。

3 教員の授業改善につながった。

インクルーシブ教育の視点で授業研究を進めたことで、教員が意図的に特別な教育的支援を必要とする生徒の支援を考えた。そのことで、教員の指導の幅が広がった。